

中野区教育委員会会議録 平成21年第2回臨時会

○開会日 平成21年7月24日（金曜日）

○場 所 中野区教育委員会室

○開 会 午後 1時09分

○閉 会 午後 3時10分

○出席委員（5名）

中野区教育委員会委員長	大 島 やよい
中野区教育委員会委員長職務代理	飛鳥馬 健 次
中野区教育委員会委員	山 田 正 興
中野区教育委員会委員	高 木 明 郎
中野区教育委員会教育長	菅 野 泰 一

○欠席委員（0名）

○出席した事務局職員（5名）

教育委員会事務局次長	田 辺 裕 子
参事（教育経営担当）	合 川 昭
副参事（学校教育担当）	寺 嶋 誠一郎
指導室長	喜 名 朝 博
統括指導主事	田 村 正 弘

○担当書記

教育経営分野	落 合 麻理子
教育経営分野	上 田 仁

○会議録署名委員

委員長	大 島 やよい
委 員	飛鳥馬 健 次

○傍聴者数

0人

○議事日程

〔協議事項〕

①教科書採択について

午後1時09分開会

大島委員長

ただいまから第2回臨時会を開会いたします。

本日の会議録署名委員は、飛鳥馬委員にお願いいたします。

本日の議事日程は、お手元に配付の議事日程表のとおりです。

本日、事務局職員は、協議事項の教科書採択に関係する職員として、次長、教育経営担当、学校教育担当及び指導室長に出席をお願いしておりますのでご了承ください。また、教科書採択にかかわる職員として、統括指導主事に出席を求めていますのでご了承ください。

ここで、委員会運営について確認します。

教科書採択に関する教育委員会の審議過程につきましては、中野区立学校教科用図書採択に関する規則第10条の規定に基づき、採択が行われるまでの間は、非公開とすることと定められています。本日7月24日の定例会で確認しましたとおり、本日の臨時会も非公開とさせていただきます。

(平成21年第27回定例会において公開の議決がされたため、以下の非公開部分を公開)

<協議事項>

大島委員長

それでは、協議を進めたいと思います。

では、「国語」から協議を始めます。

初めに、各委員それぞれからご意見を伺いたいと思います。

それでは、高木委員からお願いいたします。

高木委員

国語の教科書ですが、学校図書さんのものだけちょっと一回り小さいので、やはり今のお子さんには大きい判がいいのかなと。子どもたちの声の中でも、そろっていないのは嫌だとかというのもありましたので、中身がもちろん優先なんでしょうけれども、今のサイズですとこのA判がいいのかなというところでございます。

国語の教科書に関しては、どこの教科書を見ましても、私が中学校のころと比べると非常に皆カラーになりまして、よく言うと読みやすいというか、親切になっているなという気がします。題材についても、いわゆる名作のものだけではなくていろんなトピックスを使っていて、非常に教科書を読むだけの授業から指導要領が変わったということもあるんですが、いろいろ工夫ができるような展開になっているのかなと。

それぞれに特徴があるんですが、私は、現行で使っている教育出版さんのものが、流れとして構成が非常によろしいのかなと。後ろのほうに発展的なところとか整理するようなところ、あるいは漢字なんかも載っているの、そういう点では、これ1冊でいろんな勉強ができるので、私は現行のままでいいのではないのかなと思う次第でございます。

以上です。

大島委員長

では、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

私も国語を5者、目を通して見たんですが、特に1年生のほうを集中的に見ましたが、今の現行の教出は、コミュニケーション能力を育てるということで書いていますので、それでいいですよと、非常に使いやすいかなというふうに思います。特に、この目次を見ましてもちゃんと読むとか話す、聞く、書くというのが色別になっていて、一目瞭然でわかりやすいというのがあります。

最初のほうを見ると、教出ですけれども、4ページ、5ページあたりのところも最初の部分ですけれども、表になっていて一目瞭然で見やすいような、この教科書1冊の内容をぱっと見やすいようなものがあったり、それから、6ページ、7ページ、1年間通して見られるようになっていくというのがあります。あと、まとめのところでは、例えば30ページのところなんかそうですけれども、書く題材の終わりのところに「道しるべ」とかありまして、学習の手引きというんでしょうか、それが非常によいということ。それからあと、

116ページの書くというところがあるんですけども、これも具体例があって作文とか書く場合に書き方がきちっとこう書きやすくなっているというのがあります。それから、第3部のほうの196ページから246ページぐらいまでですけども、これは言語、知識のところ非常に充実していて、学ぶ力はつけやすいかなというふうに思います。

ほかにいろいろありますが、例えば古典の場合も、最初の行間に現代仮名が書いてあって読みやすいといえますか、子どもが親しみやすいような工夫があるとか、それから、読む教材が古いものもあるし新しいものもあるというふうにバランスもとれているのかなと思いますので、全体的に教科書の余白があって、白いところがあって見やすいという気がするんですね。きっちり埋まっていないというのがあります。というのが教出のいいところかなと思っています。

それから、次にいいのは、私は三省堂かなと思っているんですけども、これもスピーチしようとか、体験文を書こうとか、非常にわかりやすいんですね。現代的な題材も、これはちょっとやや多いかなと思いますけれども、しかし、全体構成がよいので、教出の次にいいかなと思います。

あとは光村もいいんですけども、まとまっていて使いやすいと思いますが、ちょっと特色が弱いのかなと思いますね。

東書は、ちょっとさっき言った、読む、書く、話すとかそういう分類でいくと、ちょっと散らばっているのでわかりにくいかなというような気がします。

ということで、現行でよろしいかなと思っています。

以上です。

大島委員長

では、山田委員、お願いいたします。

山田委員

国語は、やはり皆さんがおっしゃっているように、伝え合う力を高めるとか、思考力や想像力を養い言語活動を豊かにするという目標があるわけなんですけれども、また、中野区では重要な中でやはりコミュニケーション能力ということの視点からということで5つの教科書を見たわけですけども、また、指導要領の改訂で2年、3年については平成24年度から授業数がふえるということがありますので、そういった視点も踏まえてということですけども。

先ほど高木委員がおっしゃったように、学校図書ですか、判が小さい。子どもたちから

は、なるだけコンパクトで軽いものという意見もあるんですが、なかなかそれだけではと
いうころですけれども、学校図書も古典教材はなかなか読みやすく構成をされているかな
という印象を持ちます。

また、三省堂は、特に資料編の「小さな図書館へようこそ」というコーナーがあるんで
すけれども、中野区では読書活動ということに重点を置かれているので、そういった意味
での活動をするにはいいのかなと。また「道しるべ」ということが記されていて、学習の
方向性だとか生徒の自主性にとっては学習しやすい。全体的に三省堂は、写真や絵が非常
にカラフルだなという印象を持ちました。

一方、光村ですけれども、この教科書はどちらかという書くということが、例えば1
年生で読書記録を書こうとか、2年では人物紹介パンフレットを書こう、3年では新聞の
特徴を生かして書こうと、書こうという視点が結構しっかりできていて、また、読書案内
がカラー版できれいになっている。中身の中ではどちらかという伝統的な教材が多いの
かなと、これは光村の特徴なのかなというふうに思っていました。

東京書籍の特徴は、どちらかという科学的な教材ですかね。1年で「ハチドリ不思議」
、2年では「考ええるイルカ」、3年「テクノロジーと人間らしさ」、どちらかとい
う科学的な教材が結構充実しているように思いました。

現行の教育出版なんですけれども、今度の学習指導要領は時間数がふえるといったこと
を考えると、3部構成になっていまして、基礎基本、補充発展、言語知識ということです
から、そういったものに対応できる構成になっているんじゃないかなということがありま
す。また、取り上げている題材が古いものから新しいもの、ヘルマン・ヘッセが入ってい
たり魯迅が入っていたりするんですけれども、一方では、野坂昭如の「ウミガメと少年」
といった戦争ものが取り上げられていたり、最近では村上春樹さんの「バースデイ・ガ
ール」みたいな新しい題材も入れているということで、そういった意味では子どもたちにと
って学びやすいのかなというふうに考えられます。また、会話だとか討論についてもいろ
んな取り上げ方をされていて、そういった意味では子どものコミュニケーション能力が育成
できるということで、現行の教育出版、やはりなかなかいい教科書ではないかなというふ
うに思いました。

以上です。

大島委員長

では、教育長、お願いいたします。

教育長

国語は、すべての学科の基礎となる最も重要なものだと思います。こういった中で力を伸ばして思考力とか想像力を深めまして、論理的な文章なんかも読みこなせて使いこなせる、いわゆる読解力というものにもつながるものだというので、すべての教科の基礎になって、私は本当に国語の教科書というのは一番大事なんじゃないかなと思っております。また、他人の言葉をよく聞いて自分の考えを人に伝えるというコミュニケーション能力の向上にもこの国語力というのは非常に重要な課題だと思っております。

そうしたことから、教科書ですけれども、国語というのが好きになる、そんな子どもの興味とか関心とか意欲が育てられるようなそういった楽しい内容のものであると、また、読解力とかコミュニケーション能力がつくような、そういった工夫が必要だと思っております。そういう観点で見えますと、当然ですけれども、どの教科書も一定レベルに達していると思いますし、特にだめだということはないと思います。

ただ、実際にこう読み比べてみますと、大分違いというのはあります。そういった違いの中で、まず、私は教育出版、今現行のものが一番いいと思いましたが、例えば想像力を高める文学的なものとか、それから読解力にかかわる論理的なものとか、話す・聞く・書くといったコミュニケーション能力を高める実習的内容の、こういったもののバランスが大変いい教科書だろうと思います。それから、1年の最初のところで古典を入れておまして、そういう面では特徴になっております。それから、写真の中から自分でそこに物を見出して、そこに言葉をつけていって想像力をはぐくむというような形の教材が各学年に出ています、そういったものも魅力があるのかなと。

あと、先ほど山田委員からお話もございましたけれども、あるいは、ほかの委員からもございましたが、3部構成ということで、発展学習、これにも対応しているということがあります。そもそも、何とかの国語じゃなくて「伝え合う言葉」というこの教科書につけた名前自体に、この会社のいわゆるポリシーというんですか、コミュニケーション能力とこのをつけていくようなことを目指しているということ、工夫が入っているんじゃないかと思えます。

それから、3年生に、ちょっと細かい話になりますけれども、イッセー尾形のところが大変おもしろい。3年の186ページ、これは大変すぐれた教材だと思えました。イッセー尾形というのは一人芝居をする人ですけれども、それをどうやってつくっていくか、自分の一人芝居をですね、それが書いてあるんですが、いろんなところで見た人をスケッチし

たり、後でかいたりして、そこに自分でセリフを入れていく、そこから始まるみたいなことが書いてあるんですけども、大変すばらしい教材だということで感心いたしました。

それから、この教育出版の特徴というか、子どもに一番重くてというのがあるんですけども、ページ数が非常に多く、一番重くなっております。ただ、やはり国語についてはある程度内容を充実させたほうがいいと思いますので、やはりこのぐらいあってもいいのではないかというふうに思います。

それから、漢字のページ数が、東京都の調査では82ページと5者中最も多いというふうなことであって、漢字の学習も充実しております。

ほかの教科書ですが、光村図書などについても大変バランスがとれておりますし、それから東京書籍、それから三省堂なども、バランスというんですか、いろんな面で使いやすいような教科書だと思いますけれども、先ほど言いましたような、一つ抜けているとまでは言いませんが、少しこちらのほうが、教育出版のほうがすぐれているのではないかと、私は思っております。

私からは以上です。

大島委員長

では、最後に私のほうから感じたことなんですが、5つの教科書を読み比べさせていただきまして、どれもどなたかのお話があったように一定の教科書としてのレベルは満たしていると思いますし、特に悪いということはないと思いました。

ただ、例えば三省堂とか東京書籍などは、目次のところに各単元のねらいというのがはっきり出ていまして、学習内容がきちんとここでは何を学ぶというねらいというのが明示されているというところがいいと思いましたし、三省堂などは、話す・聞く・書く、それぞれの目的別の教材というのをきちんと明示しているというところがいいかなと思います。

それに比べまして学校図書のほうは、系統立った学習計画とかねらいというようなことが特に書いてないようなので、その教材のねらいというのがわからないという点がちょっといま一つ教科書としては不満かなと。

光村のほうは、若干ちょっと内容的に詰め込んでいるというか、教材などの分量が多いような気がいたしまして、ちょっと全部をやるには多過ぎるかなという印象でして、文学史まで解説してあるようなところが特色があって、そこはある意味いいとは思いましたけれども。

そういう印象に比べまして、現行の教育出版のほうは、今のお話もあったように、題名

が「伝え合う言葉」というような著者の思いが出ているというところも特徴があると思いますけれども、それから大きな特徴として、初めのところに学習のねらいという折り込みになった長いページがありまして、ここで各単元とか教材ごとのねらいがはっきり出ているということと、後ろにも学習記録シートというのを書けるようになっていてというようなところが学びやすいんじゃないか。それからその次、例えば1部、2部、3部という構成になっているということも、レベルに合わせて教材等をまとめてあるというのが使いやすいと思いましたがし、例えば第1部の学習のためにというところを開きますと、読むという観点からこういうのを挙げてあるとか、話す・聞くという観点からこういう教材、書くという観点からこういう教材というふうに、教材とねらいというのをはっきりここで明示しているというようなところがいいかなと。それから、1年を通してのステップ型学習計画というのを明示してありまして、何月ぐらいにはこういうことをやるとかというようなことのスケジュール的なものを書いてあるということも特徴でよろしいんじゃないかと。

それから、古典の扉ということで古典も取り上げてありますけれども、これも対訳がついてありまして、初めて古典に親しむ生徒にも親しみがわくように心使いがされているというような点。

あとは、周りの余白等も適当にありまして見やすいということですし、巻末のほうにはいろいろデータベースコラムということで、いろいろなミニ知識とか、調べ学習をするときの参考になりそうなこと、あと原稿用紙の使い方とか、いろいろなちょっとおもしろい資料的なものが充実しているということもいいんじゃないかということで、どの教科書でも悪いということはないんですけれども、教育出版のものは大変学びやすい、使いやすい教科書ではないかというふうに思いました。

ということで、ほかにご発言、何かつけ加えること等はありますでしょうか。

では、ありがとうございました。皆さんの意見を伺うとともに、教科書採択基準からしますと、現行採用されております教育出版の教科書「伝え合う言葉」を、皆さん推薦されているというふうにお聞きしましたが、「国語」につきまして、この教育出版の「伝え合う言葉」という教科書を採択候補とすることで異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

大島委員長

では、ご異議ございませんので、「国語」は、教育出版のものを採択候補とすることにいたします。

では、続きまして、「書写」について協議を進めます。

では初めに、各委員それぞれからご意見を伺いたいと思いますが、飛鳥馬委員からお願いいたします。

飛鳥馬委員

書写のテキストですね。教育出版については、毛筆と硬筆のバランスがとれているというふうに思います。特に毛筆の後に硬筆もという、連携ですか、関連ですね、それがうまくいっているんじゃないかと感じました。

あと、余り書くこととは関係ないかもしれないんですが、私たちが日ごろ筆で書くというのは、年賀状も余り書かなくなったんですけれども、筆を使うということで、こういうことはどこでも学ぶ機会がないのかなと思うんです。要するに、筆と紙ができるまでとか、硯と墨ができるまでとか、何かこう書写に、お習字に興味を持たせるという意味では、こんなのもいいのかなと思ったりもします。

あとは、手本が大きかったり、筆順がきちっとこう写真で出ていたりして見やすいのかなと思いますので、これも今の教育出版でよいかと思っています。

以上です。

大島委員長

では、山田委員、お願いいたします。

山田委員

書写については、1年生で約28時間、2、3年で約10時間という時間の中でということになりますと、毛筆と硬筆とがあるわけですが、子どもたちが触れることを考えれば、できるだけ毛筆になれ親しむということが一つの視点ではないかなと思うんですね。そういった視点で5者から出ている教科書を比較検討しますと、毛筆を中心とした構成になっているのが現行の教育出版と、光村がやや毛筆に重点を置いているかなというイメージを持ちました。ほかの例えば日本文教出版などは、比較的バランスよくとれているのかなと思います。

一方、東京書籍などは1時間でやれる内容がまとまっているというような教科書のレイアウトになっていると思います。教育出版に関しては、先ほど飛鳥馬委員がおっしゃったように、筆の進め方などですね。また、題材も道徳的なものが多いことでもありますので、国語との関連性も考えると現行の教育出版でよろしいんじゃないかなと思います。

なお、光村についても、毛筆が中心で写真等も豊富でありますので、これも比較的よく

できている教科書じゃないかなと思いました。

私からは以上です。

大島委員長

では、高木委員、お願いいたします。

高木委員

書写というのは、私は子どものころ、お習字を習っていましたが、当然、私塾ですと教科書はないのでお手本を見てやるという形なので、こういった形で改めて教科書を見てみると、丁寧いろんな書き方を教えてくれるなという気がします。毛筆から入っていくのと、鉛筆から入っていくのとあると思うんですが、やはり切り口としては毛筆主体のほうが入りやすいのかなという気がします。

あと、正直に申し上げて、そんなに違いが、ほかの科目と違ってちょっと私にはとれないんですが、一つは、時間数が少ない中でどうやってうまく教えていくかということになると、例えばほかのところでもついている教科書は幾つかあるんですが、書初めの見本がついているとか、漢字のまとめがついているとかっていうところで、一通り全部いろんなアイテムがそろっているのは現行の教育出版なので、これが一番多分教えやすいというか、短い時間の中で一番うまく使える教科書なんではないのかなと思っております。

大島委員長

では、教育長、お願いいたします。

教育長

書写ですけれども、正しく美しい字が早く書けるというようになるための教科ということですけれども、先ほどからお話が出ていますように、毛筆と硬筆、どちらかというよりは漢字、平仮名、片仮名の基本であります筆運び、とめたり、はねたり、払ったりというような、そういった筆運びをまず覚えなければならないので、毛筆を中心にやはり構成したほうがよろしいのではないかと思います。

東京都が調査した結果がありますけれども、全体に占めます毛筆のページの割合ですけれども、教育出版が49.0%と最も高い。以下、東京書籍44.5%、光村図書41.3%、日本文教出版40.1%、学校図書39.2%、三省堂36.6%とこのようになっております。

そういう面で東京書籍も毛筆のページは多いんですけれども、その他の資料もかなり多いということで、一番わかりやすいと思うのは、やはり現行の教育出版ではないかと思っております。

光村図書につきましても、毛筆と硬筆のバランスがそう悪いわけではなく、内容もよいと思いますけれども、その辺若干、硬筆のほうが少し教育出版に比べると重きがあるのかなという感じがいたします。

それから、日本文教出版ですけれども、筆使いの写真とか文の説明などについてやや課題があるのかなと。

学校図書とか、あるいは三省堂につきましては、先ほどちょっと数字も出ましたが、硬筆のほうに少し偏っているのではないかとということで、全体的に見て、教育出版がよろしいのではないかと考えております。

以上です。

大島委員長

では、私の意見を申し上げますと、私も書写という科目の特質として、やはり毛筆に触れる、毛筆を習うという機会はほかにはないと思いますので、毛筆に親しむという機会を確保するという意味で書写という授業は大変重要じゃないかというふうに思いますので、毛筆が中心のほうがよろしいのではないかと。

その点、三省堂などは硬筆が中心というふうに思います。それでほかのものは、例えば光村とか文教出版、それから教育出版も、毛筆についてはある程度重点を置いて触れられていると思いますが、文教出版などは、お手本にしている字が若干ちょっと「泉」とか「清い風」ですか、これは悪いということはないんですけども、お手本の字としては、比べますと教育出版のほうがよろしいような、適切であるような気がいたしますね。「禁句」とか「出発」とか「約束」とか、字のバランスとか部首、へんをつくりの両方出てくるようなものとか、そういう文字のバランスというのを学ぶという意味では適切な手本ではないかというふうなことで、そういう点から文教出版、学校図書等比べてみますと、やはり教育出版のものが一番いいのではないかと。

それから、姿勢とか持ち方についての写真も、各本大体ありますけれども、例えば東京書籍のものなんかは、人の全体写真があるんですが、筆の持ち方について説明が少ないというようなことで、そういう持ち方、姿勢についてきちんと写真があつたり説明があるという点で、教育出版がいいのではないかと。書き方の説明も丁寧になされているというふうに思います。

学校図書のものはお手本がちょっと小さい。やっぱり毛筆のものですから、ある程度のお手本の大きさが欲しいなというふうなことでございまして、そんなようなことで現行の

教育出版のものはよくできていると思いますし、国語の教科書と直接関連性というのはいかかもしれませんが、同じ出版社というところもいいのではないかということで、教育出版がよろしいのではないかというふうに思いました。

それで、これまでのご意見のほかに何かつけ加えること等、ございますでしょうか。

それでは、皆さんのご意見を伺うとともに、教科書採択基準からすると、教育出版の教科書が最適であると思われまますので、「書写」につきましては、教育出版を採択候補とすることにしたいと思いますが、異議はございませんでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

大島委員長

では、異議ございませんので、「書写」は、教育出版を採択候補とすることにいたします。

では、次に「地理」についての協議を始めます。

初めに、各委員それぞれからご意見を伺いたしたいと思います。地理について山田委員からお願いいたします。

山田委員

これから社会科の教科書の採択に移るわけですけれども、全般的に社会科の教科書がすごく図だとか写真が多くて全体に文章が少ないなというイメージが、どの分野にもあるような気がいたしました。

それはさておき、地理の分野では、目標の中に国際社会で生きる平和で民主的な国家社会の形成者としてというような一文がありますので、そういった視点からということで各教科書のほうを見てまいりました。

日本書籍新社なんですけれども、ちょっと字が小さいのと、ちょっと写真が不鮮明な点があるように思います。

日本文教出版では、先ほどの国際社会ということの視点では、世界の国のとらえ方が少し不足しているかなと。中学生なので余り漫画的なところは必要ないんじゃないかなというイメージがあります。

帝国書院は、やはり帝国書院なりに地図がきれいだなというイメージがあるんですけれども、そういった意味で調べ学習ということの領域には比較的たけた教科書ではないかなと思います。

旧大阪書籍、分量としては比較的まとまっているかなと思うんですけれども、残念なが

ら西日本中心の題材が多いというイメージがあります。

東京書籍は、その点では世界の国を多く取り上げていて、写真だとか資料、文章のバランスもいいというようなイメージを持ちます。

教育出版なんですけれども、国際社会に生きるということの中では、例えば「日本は豊かな国」、「すしって本当に和食？」という形ですしの材料を多く持ったり、「食べ物はどのように」ということで食料自給率なんかも取り上げていましたので、そういった点では国際社会の中でという視点がかなりとらえられているかなという点と、環境問題を取り上げている点がいい点かなと。例えば、「なぜ地球は温暖化しているのか」とか、「アイヌの人たちの文化を学ぶ」などがございます。

また、調べ学習では、地域として八王子を取り上げていますけれども、この八王子の自然、都市化農業などの視点、それを聞き取り調査をして発表するというふうな調べ学習に向いているということで、比較的地域としては中野に近い八王子を取り上げているということが挙げられます。全体的に色使いがきれいで、これはいいかどうかわかりませんが、写真、絵が豊富にあると。視覚的には訴える資料が多いということがあります。

また、東京都の資料の中では、東京に関する地理的事象を取り上げている回数については、教育出版が一番多くて31カ所という記載もありますので、そういった意味では、中野区の子どもたちにとってということだと、教育出版の現行で申し分ないんじゃないかなというふうに思いました。

以上です。

大島委員長

では、高木委員、お願いいたします。

高木委員

地理の教科書は、私は読んでいて、意外と各社個性があるなど。地理というと地名を覚えるようなイメージもあると思うんですが、私はやはりだんだん上の学校に行くときに、調べ学習ですかね、中学でいうと。いろんな課題を考えたり、グループワークをしたり、ディスカッションしたりして、いわゆる地名を覚えるんじゃない学習というのはやっぱり非常に中学校では大切なのだと思っております。この観点からいいますと、現行の教育出版図書が一番オーソドックスとは言わないんですけれども、レイアウトに工夫があって、非常にここからただ読むだけではおもしろいなという形になってしまうんですが、逆に言うと、国語のような教科書読みはできないので、先生の教え方というか取り組み方はくす

くれると思うんですが、中野区が目指している教育に一番近いのかなと思っております。

ただ、若干、赤がばっと使ってあたりするので、少し色味が落ちつきがないかなという気がします、内容的にはこれが一番だと思っております。

以上です。

大島委員長

では、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

地理は、私は特に帝国と東京書籍と教出と3つ中心に見たのですが、帝国書院の教科書は、地理の専門会社なので、いい地図がたくさん入っているんですけども、せっかく地図帳を出している教科書なので、もうちょっと同じ地図をここに入れなくて内容を工夫したらいいのかなというような気がしました。お金をたくさんかけてきれいな教科書であると思うんですけども、会社の特色が生かされていないといえますか、地図帳が要らないで、これで教えられちゃうみたいなのがあるところがあるのでどうかなという気がします。

それから東京書籍、東書は、山田委員も最初に言われたように、社会科の教科書がみんな資料集的というか、写真集的というか、そうなっちゃっているという話がありましたが、東書は特にそんな感じがするんですけども、いろんな資料がたくさんあるのですが、資料集でもないし写真集でもないし絵本でもないみたいな、いろんな資料がごちゃごちゃ入っているんですけども、そういうばっと見たときに資料集的な感じがしないでもないの、つまり、本文をもう少ししっかり書いてほしいなと思うんですね。本文を書いてもらって資料が使えるというふうなのがいいかなと思うんですけども。

それと逆に東書は、今後は地図帳の地図みたいなのをそのままたくさん入れているんですよ。地図帳をこれも要らない感じで、何で地図帳があるのかなぐらい同じような地図をたくさん入れているので、これはやっぱりもったいないなというふうな気がするんですね。あと地図の図法の説明なんかも載っているんですけども、非常に細かい難しいこともちょっと多かったです、もうちょっと単純化してもいいような気がしました。

それに比べて今使っている教育出版、教出のほうは、これは皆さん言われているように、サブタイトル「地域にまなぶ」と書いてありますけれども、地域を中心にとか、あるいは調べ学習的ということを中心に編集していると思うんですが、特に最初のほうは、私はいいと思うんですよ。この最初のほうの目次をあけてすぐの後ろのほう、子どもの地理に

対する、あるいはそういう社会科に対する興味を持たせるようなものがずっといっぱい入っているんですね。例えば4ページ、5ページだと世界のあいさつみたいなのを書いてあって、6ページのところは地球っていうのはどんな星か、8ページのところには地球儀を眺めてみようと、10ページは地球の位置を知るにはどうしたらいい、緯度・経度、ちょっとこれ緯度・経度は1年生じゃ難しいと先生が書いてあるのを見ましたけれども、それから、季節はどうしてできるのか、自転とか公転とかの話、そして、「世界の時刻はどこも同じ?」、「東京の東はどこ?」とか、そして、ここまで来て今度初めて世界の地図を描いてみようと。世界地図と日本地図の略図を書けるのが子どもの必修になっているので、どこでも入ってきますけれども、ここまで来て初めてそういうのに入ってくる。それから、世界は幾つ国があるとか、世界の面積と人口を比べるとか、国境線はどうなっているとか、世界を区分するにはどんな区分の仕方かと。つまり、子どもは、何かこれどうなっているのかなと思いきや、そんな易しいものからずっとこう興味関心のあるもの、非常に1ページ、2ページぐらいでまとめて、地図の勉強全体を網羅するような形で導入みたいな形で使っているのがいいのかなと思うんですね。

日本の地域のところもそうなんですね。日本の周りはどうなっていますか、日本の国土の広がり、日本の区分はどうなっていますか、日本地図を書いてみましょうとか、都道府県の県庁の所在地、そういうふうにだんだん学ぶときに子どもの意識づけをしてモチベーションを高めると言ったらいいのか、ちょっと言い過ぎかな。そういうので最初の部分でかなり工夫しているんじゃないかなという気がします。

それからあと、身近な地域を学ぶ、地域を調べて、これは八王子のことが出てきて、非常に調査方法とかかなり細かく具体的に書いてあるんですが、こんな必要がないという先生もいるのですが、これをそのまま八王子のことを教えるのではなくて、これを下敷きしながら中野のことを教えるわけですから、そういう意味では調べる方法、地域学習の方法が書いてあってやりやすいのかなというような気がします。

あと全体的にバランスもとれていていいのかなと。昔みたいに日本の都道府県も全部網羅して教えるとか、世界の国を全部教えるとか、そういう時代じゃないので、非常に少ない数しか出てこないという形も多いんですけども、世界のところは、実は一番たくさん、ほかの教科書に比べて国の名前がたくさん出てくるんですね。それがいいか悪いかは、また問題がありますが、でも、出てきたほうが子どもにはわかりやすいのかなという気がします。

ということで、調べ学習等を中心にして使いやすい教科書ではないかなと思います。教育出版がいいというふうに思います。

大島委員長

では、教育長、お願いいたします。

教育長

地理ですけれども、学習指導要領なんかから私なりに考えますと、日本や世界の地理的事象に対します関心を高めて、地域の特色や地域の課題などを理解して考察して表現すると、そんな能力や態度を養うということを目標にしているということだと思います。

そうした意味では、資料が豊富で、なおかつわかりやすいというのがいいと思いますし、また、みずから調べて学習するということが大切で、そうした配慮がされている教科書がいいと思っております。また、身近な地域の教材などが豊富なものがあればなおいいと思います。

先ほどからお話ありますように、教育出版につきましては、全体的に調べ学習が載せてありまして、そういった姿勢が明確に出ている教科書だと思います。

それから、東京都の調査によりますと、東京都に関する事象を取り上げている箇所数では、教育出版が31で最も多いと。以下、東京書籍、帝国書院の順になっていますけれども。また、その同じ調査では、都道府県を取り上げている箇所数とか、世界の国々を取り上げている箇所数なんかも教育出版が最も多くなっています。そういう面で非常にバランスがとれていていい教科書ではないかと思えます。

それから、東京書籍も確かに少し絵が多いようなところもありますが、資料の数、それから調べ学習を中心としているなどについてバランスがとれているというふうに考えます。それから、日本の各地の特色が地図上でいろいろ頻繁に出ているというようなこともありまして、いろんなところの地域に興味を持たせて学習意欲をかき立てるという面ではすぐれていると思います。東京書籍もいい教科書ではないかと思えます。

次に、日本文教出版についても、ちょっと内容が少し前2社に比べると何となく散漫なところがございます。あと調べ学習などについても、もうちょっとのところがあるんですけども、おおむねその次のくらいの感じではないかと思えます。

帝国書院の教科書ですが、資料や図や写真などは大変多くて、内容的にも興味深いものがありますけれども、人物イラストとか吹き出しとかそういうセリフが大き過ぎまして、何となく漫画的で中学校の教科書としてはどうかというようなところもございました。

日本書籍新社ですけれども、東京都の身近な題材が極めて少なくなっています。また、写真や図の使い方がこなれていない感じがして、全体的にちょっとシャープな感じが少し薄れているのではないかと。

それから、日本文教出版の旧大阪書籍のものですけれども、これは山田委員からもご指摘がありましたように、関西地方の地図とか場面が多くて、中野区の教科書としてはいかなものかということで、全体としては、私としては教育出版、あるいは東京書籍でもいいかなと、こんなような感じでした。

大島委員長

では、最後に私からでございますが、私も見比べてみましたけれども、結論としては、現行の教育出版のものがいいのではないかと思いましたが、まずちょっと見たところ、例えば日本書籍新社などは、構成が何かばらばらで全体に散漫な印象、各テーマの構成、並べ方がどういう意図で、何かいろいろな話をごちゃごちゃと入っているような印象で、ちょっとわかりづらいと思いました。

それから旧大阪書籍のものは、アトムが案内役みたいなので出てきているんですけれども、やっぱりちょっと漫画のキャラクターが案内役というようなのは子どもっぽい印象で、漫画でしゃべらせたりというのは余りよくないような気が私個人はしております。

それから帝国書院は、直接、地図というのが教科書の中にたくさん引用されているんですけれども、これはちょっと地図が多過ぎかなと。それで、必ず授業のときは資料集というのは別に持っていて、私も授業なんかを視察に行きますと、大体、資料集の何ページをあけてというようなことで、資料集を使って授業をしている例がほとんどのように思いましたので、教科書の中に余り地図そのものを載せるという必要性もないし、ちょっとこれはスペースが無駄かなという印象でございます。

東京書籍のものは、比較的教育出版のものと似ているという構成で、2ページ見開きで一つのテーマというような構成になっているところなんかも教育出版と同じですし、初めに地球のことから話が始まって、地球の経度・緯度とかというところからだんだん世界の話、それから身近なものに、世界の略図を描かせるとか、その辺も教育出版と似ているような気がいたしまして、あと調べ学習などについても重視しているということで、これも同じかなというふうに思いました。

東京書籍のも悪くないと思いますが、初めの導入部が生徒にとって非常に親しみが持てるという意味では、教育出版のほうが心を引きつけやすいんじゃないかという印象を持ち

ましたのと、やっぱり調べ学習、フィールドワークというんでしょうか、町に出て調べようというような姿勢が、物すごく教育出版のものは重視しているように思われまして、この辺が大変いいのではないかと。

ですから、比べますと教育出版のものの方が生徒にとっては魅力的に映るんじゃないかなというふうに思いました。あといろいろ今言いましたように、教育出版のものは大体原則として2ページ見開きで一つのテーマということになっているのが使いやすいということと、あと各單元ごとのテーマのタイトルというのが、すごくキャッチコピーみたいなものが魅力的でこれがいいんじゃないかなと思いました。さまざまな視点から調べようとか、レポートにまとめようとか、テーマを決めて調べようとか、産業から見たアメリカ合衆国とか、短い言葉で単元のねらいというのを書いてあるんですが、この辺の言葉の使い方というのが、ほかの教科書に比べて魅力的で、子どもたちにとってはこの辺が心引かれるんじゃないかなと、そういう印象深いという点もよろしいのではないかとこのように思いました。

ただ、全体として各社共通しての印象ですけれども、初めに山田委員が言われたように、何か今の教科書ってちょっと写真と絵が多過ぎなのではないかというのが全体的な印象で、そういうものはほかに資料集というものがありますし、何か本文の文章の説明の部分がすごく少ないような気がしまして、ということは知識量、情報量が少ないということにもなりますし、どうなのでしょう。中学生だとこのぐらいでいいのかどうか。もう少し知識というものもふやしたらいいんじゃないかというのは全体として印象ですので、直接教科書採択には影響しないんですが。

ということで、私も現行の教育出版のものがいいのではないかとこのように思いました。

これで、各委員の意見を一応伺いましたが、何か追加するところとか。

はいどうぞ、教育長。

教育長

今の全体の話ですけれども、絵とか写真とかが多過ぎて文章が少ないというのは、私もそう思いますし、共通した意見だと思いますけれども、指導室のほうではその辺をどう考えているか、ちょっと。

大島委員長

どうぞ。

指導室長

おっしゃるとおりでして、今動きとして、これから24年度の改訂がございますけれども、もっと教科書を厚くしよう、もっと情報量を多くしようという声も出ているのは事実です。確かに、教科書をつくるときに、17年度ですから、そのときにやっぱり活字離れとか話題になって、もっと子どもたちが、絵や写真でそれこそアトムのような漫画だとかそんなもので、まずこちらに教科書に意識を向けようということで、かなりそういう意図でつくられたんだと思いますが、次回きつとまた少し変わって戻ってくるんじゃないのかなというふうに思っています。

大島委員長

わかりました。ありがとうございました。

委員の皆さんの意見を伺うとともに、教科書採択基準からしますと、教育出版の教科書が最適であると思いますので、「地理」につきましては、教育出版の教科書を採択候補といたしたいと思いますが、異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

大島委員長

では、異議ございませんので、「地理」は、教育出版を採択することにいたします。

次に、「地図」の協議をしたいと思いますが、少し休憩いたします。

午後2時02分 休憩

午後2時04分 再開

大島委員長

再開いたします。

では、「地図」の教科書についての協議を始めます。

地図は、現在出ているものが2つですね。帝国書院のものと東京書籍のものと。

それでは、各委員からご意見を伺いたいと思いますが、高木委員からお願いいたします。

高木委員

地図は、二択なんですよ。内容としては両方とも、東京書籍さんも帝国さんも過不足はないと思います。帝国書院さんのほうが、色使いがはっきりしているというか、東京書籍さんのほうが、やや落ちついているという印象でございます。やはり私は社会科系のものにつきましては、いろいろ調べて、それで教科書どおり暗記が悪いというわけではないんですが、いろいろ調べてそこで自分で考えて身につけていくというところが、やはり今

の学習指導要領では一番重きを置いているのではないのかなと思います。それを見ますと、やや帝国さんのほうが調べ学習に向いているのかなという気がします。

特に、帝国さんの最初のところのページで、ここまで中学生で必要なのかなというのはあるかなと思うんですが、地図帳の使い方、こんなときどうするなんていうのは非常にわかりやすくていいんじゃないかなと思いますので、地図に関しては帝国書院さんが私はいいと思います。

以上でございます。

大島委員長

では、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

私も地図帳は帝国でいいと思いますが、高木委員も言われたように、色合いがちょっと違うということは、地図の高低をあらわすのに、平地とか山地とか等高線で書くのか、色を塗って茶色を濃くするのがあるんですが、それが帝国のほうはやや薄くて中に対する字を見るとき、見やすいんですね。東京書籍も、これだけ見るとわからないんだけど、比べてみるとわかるという。例えば東北からこういう、遠くから見るとわかりますかね、色合いがちょっと。だから、色合いの違いということからやっぱり見やすいかどうかなんですね、結局。ぼかしでいろんな専門の地図の見方、単に色を濃くしたり薄くしたり、線をつけていたり。

最初に言ったように、東京書籍はかなり手を入れて細かく書いているんですが、余り情報量が多いと見にくいんですね。割と簡単なほうが見やすい。勉強してくると細かい何かはあるかもしれません。そういうのはあると思うんですね。

特に、帝国は長年地図を出していますので、地図専門会社ですから、いろいろ見やすくつくられていますので、帝国でいいのかなと思います。比べてみないとわかりませんけれども。

大島委員長

では、山田委員、お願いいたします。

山田委員

地図は、2者から出ていまして、先ほど私たちが地理を採択した教育出版と整合性はないわけですね、帝国と東京書籍ですから。そういうことではあるんですけども、どちらもなかなか優劣つけがたいかなということはあると思います。

ただ、先ほど飛鳥馬委員もおっしゃっていたように、例えば日本の地図を広げてみますと、東京書籍の48ページと帝国書院の66ページ、どちらが見やすいかということになると、やや帝国書院に分があるかなという気がいたします。

それから、地図帳に目次が要るかどうかは別かもしれませんが、帝国書院のほうは一応、一番最初に目次が示されているという点はあるかなと。

どちらも地図の記号は丁寧でして、例えばザビエルの上陸地ですとか、遣唐使の出発地なんかというところも両方に書いてあるので、非常に苦勞されてよくつくられている教科書であるかなというふうに思います。

東京書籍では、東京都の拡大図と所在図ということで、89ページに江戸から東京への移り変わりなんていうことで歴史との兼ね合いを少し考えたレイアウトになっているかなと思います。

先生方の現場では、使いやすいということからでは帝国書院に分があるのかなというふうに思いましたので、現行の帝国書院で問題はないのではないかなと思っております。

以上です。

大島委員長

では、教育長、お願いいたします。

教育長

実は、昨年、小学校の教科書採択をしたんですけれども、帝国書院と東京書籍で東京書籍を採択しています。それで、そんなこともございまして、そのときの議論では、東京書籍のほうが見やすいという、たしかそういう議論がありました。

先ほど山田委員がおっしゃいました東京書籍の66ページ、それと帝国書院の84ページ、全く関西の地図で、これは本当にどちらが見やすいってはっきり言えば難しいと思います。好みとか何といいましょうか、人によって違うんじゃないかなと思ひまして、見やすさというようなことではなかなか甲乙つけがたいというふうに私は思います。

そこで、ちょっと内容で見てみたんですけれども、帝国書院のほうの25、26ページに東アジアの図を反対に見た図がございまして、要するに、日本からいかに東アジアの中国とか韓国とかロシアのあたりを反対に見ると近いのか、それから、遣唐使はどこを通った、遣隋使はどこを通ったとかそんな図なんですけれども、こういった工夫のあるようなところのこういうのを見ると何か非常に文化的なものを感じますし、おもしろく図示しているようなところが工夫があるというふうに思っております。

それから、帝国書院のほう、世界の地図を比べますと若干充実していると思います。東京書籍は、その反対に日本地図のほうの充実を考えていると思いますが、全体的に私はどちらでもいいと思うんですけども、先ほど言いましたように、若干目を広げるというような意味で見ますと、帝国書院のほうはやや勝っているのかなということで、現行の帝国書院でよろしいと思っております。

大島委員長

では、最後に私の意見ですが、まず、地図についてどちらが見やすいというのは、本当にこれは人の好みもございまして何とも言えないと思いますが、私の印象では帝国書院のほう、地図はわかりやすかった、見やすかったと思うんですけども、それは例えば県境のところの赤い線が帝国書院のほう、はっきりした色合いで出て、東京書籍がちょっとぼやけた赤だとか、県の名前の赤もちょっと暗い色なんで、東京書籍のほう。帝国書院のほう、はっきりした色合いの赤で書いてあるとか、そういうことで。でも、地図自体に別に違いはないので、その辺はもう好みの問題だということだと思います。

あと帝国書院のものは、地図の見方とか地図の使い方という説明が初めにありまして、これが非常に丁寧に書いてあるというところが、学習の助けになるという意味ではいいのではないかというふうに思いましたのと、帝国書院のほうは、グラフとか資料とかが巻末のほうに割とまとめられて出ているんですけども、東京書籍のほうは、地図自体の中にグラフとか図が出てくるページが多くて、これが何かすごくごちゃごちゃして見にくい印象がありまして、地図は地図ですっきりしたほうがいいなというふうな印象があります。

そういう点からして、帝国書院のものでよろしいのではないかというふうに思いました。ということですが、ほかに委員からご発言はありますでしょうか。

それでは、ありがとうございます。委員の皆さんのご意見を伺うとともに、教科書採択基準からしますと、帝国書院の地図が最適であると思いますので、「地図」につきましては、帝国書院を採択候補とすることにしたいと思いますが、異議はございませんでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

大島委員長

では、ご異議ございませんので、「地図」は、帝国書院を採択候補とすることにいたします。

では、次に「歴史」のほうの協議を進めたいと思います。

では、各委員それぞれからご意見を伺いたいと思います。

では、飛鳥馬委員からお願いいたします。

飛鳥馬委員

歴史のほうですが、歴史は東書と教出と自由社を、ちょっと3つ集中的に見てみましたが、教育出版のほうは、最初のほうの導入、調べてみようみたいところで地域の遺跡とか出てきて、16ページあたりのところから写真がたくさんあつたりして調べ学習には大変いいなと思うんですけども。それからあとは、写真とか図の説明も結構詳しいところがありますね。写真・図も多いのですけれども、今度はさっきの地理とは逆に、教育出版のほうは、説明文がちょっと本文のほうはやや少ないかなと。本文をもう少し書き込んでくれていいのかなというような気がします。割と資料もいいしカラフルだし、見やすいというのはあるんですけども。

それに比べて東京書籍のほうですね、東書のほうは、調べ学習の方法が書いてあつたり、それからあと、まとめでも「深めよう」というところ、これは発展学習に生きてくると思うんですけども、まとめの「深めよう」。学習の全体的な見通しも立てやすいし、授業も見開きで1時間ずつということで、割と全体的にすっきりしているのかなという気がします。結構、写真・図が多いのですけれども、ほかに比べれば本文も充実してきていると思います。歴史の年表はもうちょっと何か工夫できないかなというふうな気もします。東京書籍は、1枚で裏表で歴史の年表が見られるので、ほかの教科書だと半分に切れていたりするのがありますから、1枚につながっていたほうが私は見やすいと思うんですけども、でももうちょっと工夫した年表であるといいなと思いますけれどもというふうに思います。

それから、自由社のほうですが、これはいろいろ現場の意見とか、さっきの調査報告なんかも出てきていますように、教科書全体のバランスがちょっととれていないのかなという気がします。歴史の場合、古代、中世、近世、近代、あるいはまたその後、現代というふうに分ける区分をしているところが多いのですけれども、時代区分ですね。自由社の場合には、古代史に非常にたくさんページ数を割いておりますので、ちょっと目次のページで見ますと、例えば東京書籍は古代のところは35ページなのですけれども、自由社は52ページあるんです。ですから、かなり古代史のところページを割いているというのが。現代、近現代、特に現代のところはやや少ないのかなと思います。そんなに極端に少ないというほどでは、2ページぐらいだと思いますので極端に少なくはないと思うんですが、や

や少ない程度ですね。ですから、バランスの点でどうかなというのが一つあります。それから、そういうこともあって、古代史のところというのはいろいろ書き方はあると思うんですが、中世、近世あたりまでそうなのですけれども、何というんでしょうか、文化史がかなりたくさんとられている。ですから、政治経済とか産業とか、そういう感じというよりも文化史のところはかなり力を入れて書いているというふうな気がします。

ですから、読み物風に細かい字でたくさん書いてあるので、ほかの教科書と違うところはそうだと思うんですけれども、ただ、余り小さい字だと、子どもたちは今でも大きい活字に見なれちゃっているところがあって忍耐力が必要だなと思いますけれども、そういうことですね。

それからあと、調べ学習的に使うとか、興味を持たせて生徒の関心を引くところで、もうちょっと工夫があってもいいかなというふうな気もします。

ということで、現在使っている東書でいいのではないかなというふうに思います。

以上です。

大島委員長

では次、山田委員、お願いいたします。

山田委員

歴史的分野ですけれども、この歴史については、自由社というのが新たに今回出版されたこともありまして、この歴史は一番大きな問題点かなと思います。

目標としては、国際社会に生きる民主的、平和的国家社会の形成としてのということの視点があるかと思うんですけれども、主に東京書籍、それから扶桑社、自由社を中心に、その他の教科書も見させていただきました。

教育出版については、戦争の取り上げ方が比較的歴史的な観点をとらえているかなということで、そういった点では子どもたちに教えやすい教科書になっているように思います。

清水書院は、自由社と扶桑社と同じように、ちょっと古代の分量が多いのかなということで、現代史とのバランスにちょっと疑問を持ちました。

帝国書院は、調べ学習のときに役立つインターネットのアドレスなんか載っているもので、将来子どもたちがその後で調べ学習をするにはいい教科書になっているのかなと思いますし、東アジアとのかかわりもかなり重要視されているというような特徴があるように思います。

さて、扶桑社と自由社、ほとんどよく似た教科書だなという印象が一番です。どちらも

やはり、先ほど飛鳥馬委員がおっしゃっていたように、古代の分量がすごく多くて、全体の約25%近くを占めている点が特徴かなと思います。

あと、どちらも第1次世界大戦から第2次世界大戦までの記述が多い。特に、第2次世界大戦の取り扱いについては、両者ともちょっと客観性に欠けているような記述が目立ちます。今の子どもたちの中で、例えば大東亜戦争とか、マルクス主義といった余り耳なれない言葉が出てくるということも特徴的な記述ではないかなと思います。両者ともに、例えば太平洋戦争を大東亜戦争という形での表記があつて、例えば日本軍を解放軍として迎えたインドネシアの人々とかそういった記載もあるので、ちょっと偏りがあるように思います。

あと、どちらも分量がすごく多くて、時程の中でこれを全部教え込むのは大変ではないかなというように危惧されます。

ただ、自由社の中では、「歴史へゴー」の中でご先祖様のプレゼントということで、明治維新とは何かといった、少し歴史に興味を持たせるようなコーナーもありますけれども、どちらも歴史ということの読み聞かせるといいますか、そういった資料的な本としてはいいんでしょうけれども、教科書としてちょっと偏りがあつてバランスが悪いんじゃないかなというふうに感じました。

東京書籍ですけれども、時代ごとのバランスがいいという点と、見開き2ページで1時間の内容というふうな形になっているので、現場の先生からは教えやすい教科書ではないかなというふうに思います。また、地球の歴史という形での、先ほどの地理的な分野との関連性も見てとれるような内容があります。あと、「深めよう」という内容があるんですけども、それには例えば琉球王国の話とか、アイヌ民族と日本、江戸時代のリサイクル社会といった、こういったなかなか興味を引く内容が出ているのかなと。あと165ページに学校教育の普及についてちょっと記載があつて、小学校の就学率についてとか、義務教育の年限について、1907年に4年から6年になったとか、そういった教育に関する記載がある点が特徴かなと思います。

調べ学習について、比較的発表の仕方なども詳細に記載されていますので、中野区の子どもらにとっては、学びやすい教科書としては東京書籍がいいんじゃないかなというふうに思っています。

以上です。

大島委員長

では、高木委員、お願いいたします。

高木委員

今回、新しく検定を通った自由社さんの教科書なのですが、読んでみると非常におもしろいといえますか、深くまで掘り下げているところがあるので、私は読んでいておもしろいと思うんです。ただ、すごく読みにくいんです。活字、フォントがちょっと細くて見ていると目が疲れるんですね。ちょっとこれは教科書として、私は余りどうかなと思います。

あと、ほかの委員も指摘されたように、古代のところやはり全体の分量からいうとちょっと多過ぎるので、何かいいところはすごくいいんですけれども、バランスが悪いなという気がしました。

扶桑社さんも展開としては大体同じで、こっちのほうは読みにくいというところはないんですが、やはりちょっと内容のところ、こういう筋があってもっと全体的に平均的に力を入れていけばいい教科書になるのになと思いました。

地理のところ、教育出版さんのところが調べ学習に非常に熱心に取り組んだので、歴史のほうも期待したんですが、多分、著作グループの方が違うんでしょうね。同じ出版社ですが、こちらは全然取り組んでいないということではないんですが、地理に比べると割とオーソドックスなつくりになっていて、私はやはり社会はいろんな点で、歴史もそうですけれども、例えば鎌倉幕府ができました、でもそのときに鎌倉幕府と看板がかかっていたわけじゃなくて、いろんな背景があつてそういった政権ができたということ話し合い、ディスカッションでやってフィールドワークしたり、調べたりということはやっぱり大切だと思いますので、そうすると東京書籍さんのところがポイント、ポイントで、山田委員も指摘されましたが、発表の仕方が入っていたりして、非常に子どもたちが自分で調べて身につけるといふ学習が達成できると思いますので、私は東京書籍さんの歴史的分野がいいと思います。

以上でございます。

大島委員長

では、教育長、お願いいたします。

教育長

歴史の教科書ですけれども、我が国の歴史を順序立てて学んで、大きな流れや歴史に学ぶ、歴史から学ぶですね。それから、人間や社会のあり方を考えさせるということが一つの目標だと思います。そういう面では、歴史上の人物の具体的な人間像とか、その当時の

すぐれた文化を知ることによりまして、歴史をより身近に感じて知識が肉づけされているというようなことも必要だと思います。そういうことを教科書の中に盛り込んでいくということも大事ではと思います。歴史をおもしろいというふうに感じて、今後さらに詳しく知りたいと思うような教科書がいいと思っています。

生徒からの意見なんかを見ましても、例えば篤姫を書いてほしいとか、高杉晋作みたいな人の歴史的な人物像を知りたいとか、そんなような意見が結構出ております。ただ、教科書として歴史についてなるべく偏った見方をしないような、持たないような、そういった工夫も必要でございます。こういったところが歴史教科書の難しさだろうと思っています。特に、近代についてきちんとした見方を持つ、偏った見方を持たないということが大事なことだろうと思っています。

そういった視点で見比べますと、東京書籍、あるいは清水書院あたりが、古代、中世、近代、現代、バランスもよく、歴史的事実とか人物なども適切に記述されておりまして、あるいは調べ学習なども含めて、さまざまな興味を引きつけるような素材も入っていて、よい教科書ではないかと思います。

東京書籍ですけれども、歴史の記述につきましては、結果だけじゃなくて、その背景にあるものも意識しながら書かれておりまして、バランスがとれているという感じがいたしました。私たちの歴史探検隊とか、スキルアップの欄とかありまして、自己学習の方法が書いてあります。これらは調べ学習の観点からはすぐれていると思います。それから、基礎的な項目から深める部分については深めるというようなことで、段階的に学習できるような構成になっていまして、発展的学習にも使いやすいんじゃないかと思います。

それから、清水書院もなかなかいいのではないかと。全体の記述も詳しくて、背景も含めて読ませるような仕組みになっております。特に、世界史との関係が詳しく記述されているというのが特徴だと思います。また、歴史の扉というコラムとか、私、僕の疑問というような形でところどころに歴史のなぞとか、なぜとかを提起して、歴史を学ぶ方法や興味を引き出しているというところはいいと思います。あえていえば、ちょっとこの清水書院のほうは、写真とかが鮮やかさに欠けていますけれども、先ほどから出ていますように、余り絵とか写真ばかりを評価してはいけないのではないかと。清水書院ぐらいでいいんじゃないかなというような気もいたしました。

それから、日本文教出版ですけれども、各時代の女性、それから子どもの歴史というものを特集しております。結構新しい視点というんですか、教科書としてはなかなかよい視

点を使ったのではないかというふうに思っています。

帝国書院ですが、その時代、時代の庶民の暮らしなどが詳しく記述されておりまして、歴史を身近な視点から見せようという意図がよくわかります。ただ、歴史の表舞台のほうはややちょっと平板なところになっておりまして、その辺については意見が分かれるところではないかと思えます。

教育出版ですけれども、こちらは絵や写真にかなりスペースが割かれておりまして、その分、先ほどどなたかから指摘もございましたが、文章が簡略化され過ぎているのではないかと思います。また、折り込みのページが非常に多くて見づらいんじゃないかなという気がいたしました。

それから、旧大阪書籍ですけれども、巻頭にアトム漫画がありまして、見やすく入りやすいとは思いますが、何かその後、急に難しくなるということで、なかなかそういう面では使いづらいのではないかと思います。

扶桑社、自由社についてですけれども、扶桑社のところは、至るところで日本文化のすばらしさ、日本人のすばらしさというのを強調しているのが特徴だと思います。全体的には詳しくて、また印象的な記述で読んでいておもしろい。歴史をおもしろく教えているという面ではよいのではないかと思いますけれども、ただ、余り正確ではないような、先ほどからお話ございました、古代のところ非常に詳しくてバランスに欠けていると思います。それから、反対に、近代の日本の韓国の併合でありますとか、治安維持法以後の第2次大戦に突入していく時期の記述など、主観的に記述し過ぎているんじゃないかと思ひまして、こちらもちょうとバランスが欠けているのではないかと思います。

自由社につきましても、扶桑社と同じような特徴があるのではないかと思います。

日本書籍新社ですけれども、「学習を整理しよう」という項目が各章ごとの最後のほうにありまして、わかりやすい構成になっています。また、各章に地域の歴史を調べようと、地域や生活とのかかわり合いの中での歴史を考える、そういった意図が見えております。ちょっと反対に、この書籍新社のほうは、日本人のよいところが十分記述されていないのではないかというような気もいたしまして、そんなような印象を受けました。

私といたしましては、東京書籍あるいは清水書院あたりがよろしいのかなと思います。

以上です。

大島委員長

では、私の意見を言わせていただきます。

今回の教科書の中で、皆様各委員のお話からも出ましたので重複するところも多いかと思いますが、今回の教科書の中で、自由社と扶桑社のもの、それから、それ以外の教科書というふうに大きく分けると、特徴でいうと2つに分類できるのではないかと思ったのですが、それで、扶桑社、自由社のものは、多分著者の方はほとんど同じのようでして、それでその方たちの価値観、歴史観に基づいて記述されているものであると。それは教科書の初めに、「歴史を学ぶとは」という1項目が掲げられていまして、また最後のところには、「最後のメッセージ」ということで歴史を学んでとかいうことで最後のメッセージがあるということ。要するに、教科書全体が著者から読者にメッセージという、自分の持っている歴史観を伝えるとこういうようなスタンスが貫かれているようで、それで、確かに読んでみまして大変詳しいので、私のような大人から見ますと非常におもしろい。教科書ですと、どうもどうしても簡略化して書いてしまうので、もう一步踏み込んで、これはどうしてこう戦うことになったのかというような説明が、教科書ですと、とにかく簡単になってしまってよくわからない。そういうところをもう少し踏み込んで細かいことまで書いてあるので大変おもしろいという点はあるんですが、しかし、中学校の教科書というものは、やっぱり客観的に見ているということが大事だと思ひまして、そして、特定の価値観、特定の歴史観に偏らないということは大前提として大事なことであると思うわけです。

ですから、歴史の見方についても、歴史の学会とか教育会とかで大多数の意見としてほぼ間違いない、反対意見がないというような範囲の中で教えていくということが必要だと思うんです。あとは、各生徒の方が大人になるにしたがって、自分の意思で自由な価値観、歴史観を持つということは、これはもう自由ですけれども、中学校の歴史的教科書としての役割としては、そんなわけで偏った特定の歴史観に貫かれているものは妥当ではないのではないかという意味で読んでいきますと、先ほどからお話があったように、神話とか古代についての歴史が非常に多くて、特に全体を通して天皇に関する記述が非常に多いですね。

例えば、自由社のご先祖様のプレゼントというようなコーナーがあって、ここで日本の神話について取り上げられていたり、それから天皇の系図が書かれていたり、それから、いろいろあるんですけれども、教育勅語、これは天皇じゃないですけれども、教育勅語が抜粋ですけれども書かれていたりとか、五箇条の御誓文が書かれていたりとか、あと日本語の成立についてのエピソードとか、いろいろ天皇制とかにかかわるようなことが非常に多いというのが特徴だと思います。

それと、近世の第2次世界大戦前後のことに關しても、日本海海戦について1ページを割いていて非常に詳しく説明しているとか、あとポツダム宣言受諾のときに天皇の聖断を仰いだとか、言葉使いとかに非常に価値観が出ているような。そういう第2次世界大戦まで至った経緯についても、あくまで日本を中心にして書かれているというようなことで、やっぱり中学の教科書としては、世界全体の流れの中でという客観的な記述が望ましいなというようなことで、全体としてこの2つの教科書は教科書としてふさわしくないというふうに思いました。

それで、そのほかの教科書ですけれども、読み比べてみますと、割と大体いろんなところについても説明文とかは似ているというのが第一印象です。先ほど言いました、問題ないという範囲内での記述ということで大体似てくるのかなというふうに思いました。

ただ、その中でも東京書籍のものは、調べ学習ということをすごく重視したようなつくりになっていまして、自分でいろいろ調べようというようなことをガイドしていくようなつくりになっているということが中学校の教科書としていいのではないかということと、見開き2ページで1つの単元というふうになっているのが大変親しみやすいし、学びやすいというふうに思います。

あとはそれぞれいろいろ各教科書、工夫しているところがありまして、いろいろコラムをつくったりとかしているんですが、東京書籍でいいますと、「深めよう」という教材でちょっと一部のことについては深く書いてあるようなコラムもありますし、あと歴史探検隊というようなことで調べ学習をガイドしていくというようなこともありますし、ほかの教科書が悪いということはないんですけれども、ただ、東京書籍はそんなことと。あとユーラシア大陸なんていうような地図が出てきたり、これはほかでは出てきていない教科書もありましたけれども、そういう割と昔の時代での世界的な位置づけとか、世界の情勢とものを紹介するようなところもあったりして、日本と世界ということのバランスもいいのではないかというふうに思いました。

そういうことで、東京書籍でなければというほどのことはないんですけれども、今言ったようなことから、東京書籍でいいのではないかというふうに思います。特に、今言いました調べ学習を重視しているという点、よろしいのではないかと思います。

私からはそんなところですが、ほかに発言はございませんでしょうか。

飛鳥馬委員

さっき言ったことですけれども、つくづくきょう見ていて思ったんですが、自由社が古

代の部分が多いと。私も全部ページ数を数えて比べてみたら、さっき言ったように、自由社が古代の部分が多いんですね。現代は少ないかなと思うとそうでもない。ちょっと少ないけれども。つまり、結局、中世、近世が抜けているわけですよ。少ない部分は。初めと終わりはまあまあで、初めはうんと多いですから、その分、真ん中が中世、近世が抜けていると。ちょっと今、年表を見ていたら、結局、鎌倉、室町、江戸時代ぐらいはずっと近世、中世に入るから、その辺が少ないということは、何か頼朝の時代とか、足利尊氏の時代とか、豊臣秀吉とか、それから家康とか、何か大河ドラマに出てくるようなところが少ないんだと、今そういうふうに思ったの。だから、みんな一生懸命見ているところが少ないとかわいそうだなと思ったりもしたんだけど。

でも、歴史というのは、どう見て、何のために勉強するかというのにもかかわりがあるので、そういう意味でのやっぱりバランスをどう見るかなんだろうと思うんですね。確かに、古代史というのはわからない部分も多いし、読み物としてはおもしろいと思うんですよ。私も発掘とか大好きですから、そういうのはね。だけど、日本全体として世界を見て、教科書としてと見ると、やっぱりバランスがとれるのがいいのかなと思ったり。つくづく今、年表を見ていて、この辺が少し少ないんだというので気がついたんです。

以上です。

大島委員長

ほかにはありませんか。

どうぞ、山田委員。

山田委員

指導室にちょっとお尋ねしたいんですが、歴史という教科は、小学校でもある程度学びながら、中学で義務教育が終わって、また高校でもということになるんですけども、中学校での歴史という分野のとらえ方ですね、全体の中で。それはどのようにとらえたいんでしょう。

大島委員長

どうぞ。

指導室長

小学校では、6年生で大きな流れをとらえます。中学校も同じでありまして、大きな流れの中でそれぞれの歴史の時代ごとの特色、それから人物、文化なんかを見ていくということですので、さらに、今度は高校に入ると日本史と世界史に分かれますが、日本史では、

またさらに分かれる。

日本の歴史教育の基本は、通史的に扱っていくというのがもう大原則で、小学校から同じように始まってやっていくわけです。ですから、小・中・高と行く中で、同じように歴史をやるんだけれども、その詳しさがだんだん変わってくるというところだと思います。

やはり新しい学習指導要領でも、それぞれの時代の特色を人物だとか出来事とか文化だとか、そういうもので見ていこうということになっています。バランスというのは、まさにその辺だというふうに思っております。

飛鳥馬委員

私が言うのも何だけど、昔は割と、山田委員が勉強したころは、割と通史的にやっているのかもしれないですよ、教科書もね。中学の何か易しい版みたいなので。それが最近、何年ぐらい前かわかりませんが、小学校の歴史は、一つは時代の特色のあるものをぽっぽとやっていく。だんごをくし刺しにすると言っているわけですがけれども、通史じゃなくてだんごをくし刺しにする。その時代の特色をとらえて一つ、二つとやっていけばいいという。

それから、もう一つは、今、指導室長が言われたように、人物中心ね。頼朝はとか、家康はというふうに、そういう人物を膨らませてその時代のイメージをつくっていくと、その2つだと思うんですね。それが小学校の歴史。

中学校になると、ちょっとそれが通史的に少しなってきますけれども。そのかわり中学校だと、今度は世界史の分はだんごよりもっと少ないですね、何かまんじゅうでも。世界史はほんのちょびっとしか出てこないですよ。関係のある日本とアジアの歴史みたいなね。ほんのちょびちょびっとサンドイッチみたいに入っているだけで。

高校へ行けばもうちょっとそれがずっと広がっていくことになると思いますけれども。そんな同じようなことをやっているんですけども、ちょっとずつ違うんですね。繰り返して出てくることはたくさんありますよ。小学校から高校まで。

大島委員長

ほかにはございませんか。

教育長のほうからは、東京書籍でなく、ほかの教科書も推薦するような言葉がありました。が、どうなのでしょう。

教育長

私が言ったのは、東京書籍でもいいと思うし、清水書院もなかなかよかったなというそ

のぐらいのものでございまして、東京書籍で何の異存もございません。

大島委員長

決戦投票じゃないんですけれども、そういうことでもう一回議論してもいいんですけれども。

ありがとうございました。

それでは、委員の皆さんのご意見を伺うとともに、教科書採択基準からしますと、東京書籍の歴史の教科書が最適であるかと思しますので、「歴史」につきましては、東京書籍を採択候補とするということでご異議ございませんでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

大島委員長

では、ご異議ございませんでしたので、「歴史」は、東京書籍の教科書を採択候補とすることにいたします。

では次、「公民」について協議を進めたいと思います。

では、山田委員からご意見をお願いいたします。

山田委員

中学の公民というのは、1、2年生で習った地理、歴史、今度は公民ということで、もう少し総括的に幅広く、あと政治経済などもにらんだということでの取り扱いではないかなと思います。

現在、中野区で使用しているのは教育出版ということになりますが、教育出版では、最近の時事問題が結構取り上げられておりまして、例えばカンボジアでの地雷除去ですとか、東ティモールでのPKOの活動なんかを取り上げられておられます。あと、日本国憲法が法令集の中に入っていて、わかりやすい解説になっているのが特徴で、單元ごとの配列が比較的バランスよくできているのかなというふうに思います。また、調べ学習としての資料は非常に多い。ただ、やっぱり公民も、僕は挿絵だとか図がちょっと多いかなという印象を持ちました。

東京書籍は、例えば問題解決型、ちょっと子どもたちにはおもしろい題材かなと思ったんですけれども、ハンバーガーショップの経営者になろうという今風のとらえ方をしている、問題解決になるような題材をとらえていたり、介護保険制度の仕組みなんかも取り上げている、これは丁寧かなというふうに感じました。

それから、清水書院ですけれども、日本国憲法とか基本的人権の尊重などで、いわゆる

平和学習にはかなりたけた内容が配列されていて、国民生活の経済の部分での状況などの取り扱いもできているように思います。

帝国書院ですけれども、見開きになっていまして、同じように調べ学習的なところでは、株式会社をつくろう、どんな形で株式会社をつくろうか、もし経営が成り立たなかったらどうしたらいいんだという、今風な課題もとり上げているのかなというふうな気がして、そういったところに特徴があるかなと思います。

扶桑社なんですけれども、最初に、世界で活躍している日本人を取り上げているというような特徴があります。例えば、世界の中で活躍する日本人、我が国周辺の問題、我が国の心と伝統、やはり日本の心というのに特化した内容での教科書の配列になっているかなと思うんですけれども、レイアウトの中で日本国憲法の取り上げ方が、67ページから95ページと約20ページにわたって日本国憲法と人権ということで、そういった特色的な内容の配列になっているかと思います。そんな中でやっぱり主権というものにかなり重きを置いて、日本人の拉致問題だとか、不審船問題などを取り上げています。私たちの国歌・国旗を尊重する姿勢というような、一貫した姿勢が貫かれている教科書のように思いますが、取り上げ方のバランスとしては、少し内容的にバランスが悪いんじゃないかなというふうに思いました。

ということで、全体的に見ますと、最初に社会的な分野ということで、今後世の中に出ていっているいろんなことで子どもたちが勉強するという、調べ学習ということを考えた上では、現行の教育出版で問題はないんじゃないかなというのが結論であります。

以上です。

大島委員長

では、高木委員、お願いいたします。

高木委員

公民は、結構やっぱり内容がばらばらとといいますか、歴史のように押さえる点がやはり少ないので、トピックスのとり方がさまざまなので、非常にどの教科書を見ても興味深いというか、こういう切り口があるんだなど。したがって、比較が非常に難しいですね。大きな流れの中で、この分野はこちらのほうが扱いがというのはあるんでしょうけれども。

その中でやはり私の場合は、小学校まではやっぱり社会って、結構お店の経営とかいろんな形をやってきて子どもたちは割と嫌いじゃない科目なんですけれども、中学になると覚えることが多くなってきて、理科もそうなんですけれども、嫌いになっちゃうケースが

多いと思うんですよ。もちろん、覚えるべきところは覚えると思うんですが、やはり自分たちが調べて考えたことが正しいかどうか検証するとか議論するというのを主体に置くと、歴史的分野ではちょっとどうだったかなというところだったんですが、公民的分野では地理的分野と同じように、教育出版さんが、テーマを与えておいて社会を見るとか、いろんな形で考えさせるところは非常にすぐれているなど。

あと、最初と最後が特徴的で、最初のところのいわゆる表2というところですか、そこで点字の防災マップがついているんですね。これは非常にいい例で、こういう形ではわかりやすいなというのが1点と。

あと、どこの公民の教科書も憲法や基本法的なところは載っているんですけども、みんな難しいです。私も仕事柄、教育関係の法令は読むんですけども、読んでいてよくわからないですよ。見にくいです。ところが、非常に教育出版の日本国憲法は、解説がしっかりついているのと、字が大きいので割と読みやすいと。やはり憲法というのは日本人である以上、しっかり中学校のときに触れておいていただきたいと思うので、ここところはやはり各社の中でも一番わかりやすくつくっているなという気がします。

したがって、現行の教育出版が、私は一番いいと思います。

大島委員長

ありがとうございました。では、飛鳥馬委員、お願いいたします。

飛鳥馬委員

公民は、教出か東京書籍かということで見たんですけども、公民は、今、公民、公民と言っていますが、昔は政治・経済・社会と、皆さんのときは政経、政経って言ってたんですね。今、公民に名前が変わりましたが、授業を教えていると、余り好きじゃない子も多い。経済のこととか法律のこととか嫌だというのがあってね。まだ歴史とか地理のほうがおもしろいとか言われるんですけども、そういう意味で、少しでも興味を持ってもらえる教科書がいいな、身近になる教科書だといいなと思います。ですから、今、高木委員が言われたように、難しい言葉とか何かどうしても出てくるんですね。法律用語とか出てくるんだけど、それをいかに易しく言いかえるとか、子どもに興味を持ってもらえるかということが、一つ大きな教科書の役割かなと思うんです。

そういうふうで見ると、私は教育出版のいいところというのは、ほかの教科書も同じようなことが書いてあったりするのですが、教育出版で見ると、最初のほうに子どもに関心を持ってもらうように、30ページのところから①、②と非常に大きい番号を振ってあって、

ゴシックでぱつとでっかく①だと30ページの「法に基づく政治」とか、その次のページだと2番が「日本国憲法の歩み」とか、日本国憲法の3つの柱とか、自由であることとか、難しい言葉をなるべく使わないで、平等の社会をつくるとかという専門用語をなるべく避けるような形で、人間らしく生きるとか、基本的人権という。そして、人権を守るためにとか出てきますけれども、割と易しい言葉でずっと大きい番号を振って、少しでも読みやすいような工夫をしているのかなと思うんですね。だから、編集の仕方として非常にはっきりとわかりやすい、ここで何を言いたいのかというのがわかるということをずっとこの教科書を通して、さっきの地理でも申し上げたんですが、地理も同じなんですね。地理も同じようなこういうことでやっていました。

それから、第4章、129ページのところから第4章「地球社会と私たち」というところもそうなんですね。現代の課題から未来の世界に向けてということも大きな番号を振って、わかりやすいようなことでまとめていっている。余り専門用語を使わないように、そういう配慮があって見やすいかなと思うんですね。

ですから、全体的に地理同様、資料も調べ学習にも使えるし、写真で何か見やすかったり、文字も大きいんですけれども、基礎・基本のところは大きい字で書いてあるようにとか、それからあと、1章から4章まで、今言いましたように現代社会。現代社会の最初のいいところは、ほかの教科書、公民の最初のところは現代社会をきちっと教えなさいという文科省の方針があるんですけれども、文科省が一番教えたいのは、高度経済成長から日本がすごく世界に注目されるような国になっていったというそのところを教えたいわけなんですけれども、そのときに8ページで「私たちの15年」から始まるんですね。生徒が15歳ですから、生まれたときから15年どうだと、そういう意味での私たちの15年なんですよ。だから、自分が生まれて今までどうなってきたかなということから入っていくので非常にわかりやすい。本当ならもうちょっと前が欲しいくらいですけれども、20年前とか30年前でもいいわけなんですけれども、高度経済成長。そのちょっと後になってから高度経済成長が入ってくるんですね。この文科省の公民のねらいがここにあるんですよ。だから、こういうふうに出てくると。自分の生まれたときから調べたりするのは興味があつておもしろいなと思うんですね、子どもは。そういうところへの工夫があつていいなと思つていたり。

あと中ほどに、2ページで見開きでディベートのやり方が書いてあつたりということがありますので、いいなと思いました。

いずれにしても、さっき歴史のところでもちょっと申し上げましたけれども、今いろん

な経済の難しい時代ではありますけれども、歴史も公民もそうだと思うんですけれども、子どもたちが夢を持てるような平和な社会とか世界とか、そういう持続可能な社会とか。子どもが夢を持てるようなやっぱり書き方をしてくれないと、教科書としては、だめだ、だめだばかりだとかわいそうですから、そういう夢を持てるような教科書というののも大事なことかなと思っています。

ということで、現状の教育出版でいいかなと思っています。

以上です。

大島委員長

はい、ありがとうございます。では、教育長、お願いいたします。

教育長

公民ですけれども、先ほどお話がございましたように、なかなか教えるのが難しい教科なんではないかと思います。現代の社会の仕組みを理解して、市民としての素養を身につけるということを目的にしていると思いますけれども、具体的には、国の政治とか経済とか国際社会の動き、ルールといったことをわかりやすく系統立てて教えていくということになると思いますけれども、何というんですか、私も余りよく覚えていないというか、実際、子どものうちから関係することが非常に少ないので難しいんだろうなと思います。

ですから、知識としてただ覚えるだけじゃなくて、地域社会とか、自分の身の回りのこととか、基本的人権のことの身近な素材なんかを学習していく中で、自分自身と社会との関係とか、参政権、社会貢献、国際理解など、こういったことを多面的な角度から考えられるように、そんなような教科書が求められると思います。

そういう面で、内容もさることながら、こういったことを教えるについて身近な素材とか、それから新しい課題とか、みずから学ぶといった内容があるのがいいと思います。しかも、それは非常にわかりやすいということが絶対条件で、とっつきにくい教科書だと幾らいいことを書いてあってもやはりなかなか使いにくい。子どもたちもこれを読んでよくわからないというふうなこともあると思います。

そういう面で、まず教育出版については、1950年からの時代の流れを振り返って、民主主義、政治経済、国際社会、章立てがすっきりと構成されておりました、説明文を見てもかなり、歴史のときには簡単過ぎると言いましたけれども、こちらのほうはこのぐらいいいんじゃないかなと、すっきりとしていると思います。それから、写真や絵などが多く説明文が少なくというような、そんな特徴があると思います。実際に読んでみましても何

かわかりやすいなという感じがいたしまして、教育出版のものというのは、この中では一番とつきやすいといえますか、読みやすいというような教科書になっておりまして、私も教育出版が一番いいとは思っております。

東京書籍もそんなに悪くはないと思います。章立てもすっきりしておりますし、資料も文章もわかりやすく、バランスがとれているというような感じがしますし、特徴であります調べ学習、こういったものについてもよく対応していると思っております。

それから、帝国書院ですが、写真やイラストとか漫画が非常に豊富に使われて、わかりやすくする努力はありますが、余りにもちょっと多過ぎて何か漫画みたいな感じで、いまいち抵抗があります。それから、章立てが経済から政治というような流れになっておりまして、それが特徴で、どっちかがいいというわけではないと思いますけれども、ほかのところと違うところがある。

それから、清水書院ですが、こちらのほうは説明文が多く詳しく記述されておりまして、先ほどの話の反対になりますけれども、難解な感じがいたします。中学生には難しいんじゃないか。

それから、日本文教出版ですが、こちらもちょうと難しい感じがいたしました。それから、構成もちょうとばらばらであるというふうな印象があります。

旧大阪書籍ですけれども、比較的わかりやすい文章ですけれども、写真など、あるいは素材が西日本、これもやはり向こうの出版社ですので西日本中心になっておりまして、中野区の教科書としてはいかがかなと思っております。

扶桑社ですけれども、最初のところで世界じゅうで活躍する日本人というのが出てきまして、こういうのはなかなかおもしろい着想であると思います。それから、特徴としては、権利には義務が伴うということを強調していることとか、規範意識を意識した記述などがかなり多くなっているというふうに思います。それから、3ページに尖閣諸島とか、それから竹島などの問題とか、それから領土の問題が142ページあたりに大きく取り上げていますけれども、この辺についてもちょっと特徴かなと。記述は読みやすく悪くはないけれども、そういった面で全体的なバランスがほかの教科書と大分違うなというのが印象であります。

日本書籍新社ですが、人権、平和、環境などに重点を置かれておりますけれども、おおむねバランスがとれていて、こちらについてもそんなに悪くはないと思えました。

ただ、全体的な読みやすさという意味で、私は、教育出版が一番いいと思います。

以上です。

大島委員長

では、私の意見を述べさせていただきます。

確かに、同じ政治経済分野のことを扱う教科ですけれども、やっぱり教科書によって題材とか取り上げ方とか、なかなかいろいろ特徴があると思います。今の教育長のお話にもありましたけれども、例えば私も清水書院の教科書とかは、詳しくてちょっと難しいと。中学生に親しんで勉強してもらおうという観点からすると、ちょっと敬遠されちゃうような、ちょっと難しいかなという印象。それは、日本文教出版などについてもそんな印象でございいます。中身が悪いという意味じゃないんですけれども、どうもちょっと難しいかなと思います。

それから帝国書院は、特徴としまして、会社とか経済活動についてすごく詳しく取り上げている。社会のワンシーンからというようなテーマで幾つか取り上げているんですけれども、ちょっとそういう経済活動について、消費者とかその辺がバランス的にちょっと詳しい分量が多過ぎるかなという印象を持ちました。

それから、扶桑社のものですが、今もちょっとお話が出ましたけれども、国歌・国旗についての意識ということを取り上げている点、それから、国権が侵害される場合はどんな場合か調べようというようなことで、そういうテーマを取り上げているというのがほかの教科書と違うところだろうと思いますし、それから、先ほどちょっとお話が出ましたように、憲法についての記述が大変多いというような特徴もあるかと思います。ちょっとバランス的に言ってどうかという疑問があります。

東京書籍のものもなかなかいろいろ取り上げられているもののバランスもいいですし、使いやすい教科書で、学習への興味も持てるような構成にはなっているかと思っておりますのでいいとは思いますが、教育出版のものと比べますと、教育出版のものは、とにかく、まず一番初め開いたときに、先ほどもちょっとお話が出ましたが、点字の防災マップというのが出ているというのが、これが何といいますか、象徴的に非常にいい。今の社会での障害者の方とともに生きていくという社会を目指そうという、そういう象徴としてこういうものを出しているというところがとてもいいんじゃないかと。大変いい感じがしましたし、それから、やっぱり見開き2ページで1つの単元というふうになっているのが見やすいし、勉強しやすいと。

ここもまた、今お話出ましたけれども、それぞれの各ページのタイトルがキャッチコピー

一というんでしょうか、非常に興味を引くようなタイトルになっていまして、やっぱり先ほどの飛鳥馬委員のお話じゃないですけども、どうも敬遠されちゃうということがありがちだと思うんですけども、その点、わかりやすく興味を引くようなキャッチコピー的なタイトルがついているのは、みんなの学習意欲という興味を引くという意味でいいのではないかというふうに思いまして。

それと、地方自治ウオッチングとか裁判ウオッチングとかというような言葉で、これもみんなの興味を引きそうな言葉で、そういうものを調べ学習をしようというようなことを提唱したりしているのも、大変いいのではないかというふうに思いまして、取り上げているもの、題材のバランスもいいかと思います。

そういう生徒から見てもやすいとか、親しみやすさという点で、東京書籍よりも教育出版のほうがいいかなというふうに思いました。

私の意見は以上ですが、そのほかに発言はございますでしょうか。

では、委員の皆さんの意見を何うとともに、教科書採択基準からしますと、「公民」については、教育出版の教科書が最適であると思いますので、教育出版の教科書を採択候補とすることでご異議ございませんでしょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

大島委員長

では、異議がございませんので、「公民」については、教育出版の教科書を採択候補とすることにいたします。

それでは、時間も来たようでございますので、本日の協議はここまでということにいたします。

では、本日はこれにて閉会いたします。

午後3時10分閉会